

令和元年度松江工業高等専門学校外部評価委員会

1. 日 時 : 令和2年3月4日(水) 13:30~15:30
2. 場 所 : 松江工業高等専門学校 会議室
3. 出席者 :

【外部評価委員】

高等教育機関関係

- 秋重 幸邦 氏 国立大学法人 島根大学 理事・副学長 (学術研究・イノベーション担当)
芦田 文博 氏 国立大学法人 島根大学学長特別補佐 (研究戦略担当)

地方自治体関係

- 藤間 博之 氏 公益財団法人 しまね産業振興財団 副理事長

地域教育関係

- 池田 宗市 氏 島根県中学校長会長 松江市立第三中学校長 (欠席)

産 業 界

- 今岡 克己 氏 一般社団法人 松江テクノフォーラム顧問

本校関係者

- 糸原 保 氏 松江高専同窓会 副会長

【本校出席者】

- 平山 けい 校 長
原 元司 副校長 (教務主事)
宮下 眞也 副校長 (管理運営担当)
村上 享 校長補佐 (学生主事)
高見 昭康 校長補佐 (寮務主事)
箕田 充志 校長補佐 (専攻科長)
堀内 匡 校長補佐 (研究担当)
森田 正利 学生相談室長
早竹 昭人 事務部長
木村 猛 学生課長

4. 日 程

開 会

- (1) 校長あいさつ
- (2) 委員長及び委員紹介
- (3) 本校出席者紹介
- (4) 「本校の教育評価と改善」の状況報告

1) 概要 報告者 宮下副校長

2) 教育活動

教育関係 報告者 原副校長（教務主事）
箕田校長補佐（専攻科長）

学生支援関係 報告者 村上校長補佐（学生主事）
森田学生相談室長
高見校長補佐（寮務主事）

研究活動 報告者 堀内校長補佐（研究担当）

- (5) 質疑応答
- (6) 委員による講評
- (7) 校長謝辞

閉 会

開催に先立ち、木村学生課長より資料の確認があり、続いて、開会に当たり、平山校長から挨拶があった。

○木村学生課長

ただいまから令和元年度松江工業高等専門学校外部評価委員会を開催いたします。開会に当たり、本校の平山校長よりご挨拶申し上げます。

○平山校長

みなさん、こんにちは。年度末のお忙しい中、また、コロナウイルスで大変な時期にお集まりいただき、ありがとうございます。

昨年度の外部評価の報告書をご覧いただくと分かりますけれども、報告という形で作らせていただきました。そして、これを保護者の皆様、関係される方に少し配らせていただき

ました。今日の評価では、これがきちんと改善されているかどうかという点も見ていただき、PDCAが回っているかということも評価していただければありがたいと思っています。

それから、昨年度の最後のところで「学生相談室を含めた図書館の改修が行われて、4月にはできる予定です」と申しあげましたけれども、半年ほど延びております。その辺りもご了承くださいたいと思っています。

コロナウイルスの関係で、ここにおります各教員からの説明を少しずつ短くさせていただきたいと思っています。足りない点をご質問いただければありがたいですけれども、その点はご了承くださいたいと思います。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

議 事

○木村学生課長

木村学生課長から、「委員長の選出については、本委員会規則により、委員の互選により選出することとなっているが、島根大学理事の秋重先生にお願いしたい」との提案があり、委員の了解を得た。

○秋重委員長

今、ご指名にあずかりました島根大学理事・副学長をしている秋重と申します。本日はよろしく願いいたします。

コロナウイルスが蔓延している時期の開催となりまして、まさに厳戒態勢みたいな、少し距離のあるような気もしますし、みなさんもマスクをされていますので、なかなか議論しづらい環境かとは思いますが、短い時間ではありますが、質の高い議論をしていきたいと思えます。ご協力のほど、よろしく願いいたします。

続いて、各委員の自己紹介と学校出席者の紹介は省略され、「本校の教育評価と改善」の状況報告として、資料に基づき、松江高専の報告者から説明があった。

松江高専からの説明後、質疑応答に入った。

○秋重委員長

ご報告、どうもありがとうございました。

それでは、質疑応答に移っていきたいと思います。何かご質問等がありましたら出していただければと思います。

それでは、私のほうからよろしいですか。外部評価委員会の報告という形で、こういうパンフを作ってくださいまして、どうもありがとうございます。

前回、去年来たときに色々指摘した事項がこうやってきちんとまとめられまして、それが学校内外の方に公表されたということは非常に良いことだと思っています。今回の発表におかれましても、「こういうことを意識しながら PDCA をきちんと回すんだ」ということで、色々新しくなったところを言っていただきまして、ありがとうございます。

私が関係した3つのポリシーのところでは、ディプロマ・ポリシーなどをきちんと要覧などに書き込んでいただき統一化されまして、さらに番号（DP 番号）を振ったところの科目をきちんと取らなければいけないという、実質化的なところもやっていただきましたこと、本当にありがとうございます。

聞いていて疑問に思ったところがいくつかありましたので、それを教えていただければと思います。一つは就職の話なのですが、県内就職率というのが一つの大きな努力目標として、特に COC+ では、それを目標にしてやってきたわけです。一応 COC+ は今年度で終わりになりますが、このあとはコンソーシアムを作って、さらに同じようなことをやっていこうということになっています。

6割が就職されるということで、その内訳みたいなものが書かれていなかったのですが、就職についてはほとんど100%で、そんなに問題はないと思いますが、県内・県外というところになると、どのような取り組みになっているのかなというのが少し気になりました。

それから、専攻科のほうでは2割から3割くらいが県内就職であるという話がかかれていたのですが、本科のほうはどうなっているのか、少し教えていただきたいと思います。

○平山校長

本科のほうも、学科、年度によって異なりますが、就職する学生の30%程度が県内就職です。昨年度も同じようなことを申し上げさせていただいたのですが、うちが追えていない部分というのは、就職ではなくて、県外の大学へ編入学していく学生で、Uターンしてくる学生も間違いなくおります。そのUターンしてくる学生が、島根県内にどういう企業があるかというようなことを知る上で、このCOC+や、その他の県内企業、松江テクノフォーラム・企業との連携で動いていることが非常に役立っているはずですので、外へ出ていった学生をどう

追っていくかというのは去年も指摘を受けました。その辺りをどう追っていくかというのが多分課題になるだろうと思っております。

補足があればお願いします。

○堀内校長補佐

県内就職に関しては本科も専攻科も約3割、今、現時点で就職者のうちの3割が県内企業に直接就職いたします。ただ、校長が申しあげましたように、大学などに行ったあとに戻ってくる学生もおりますので、本当はもう少し多いと思います。過去の同窓会の住所などのデータから見ると、30歳くらいで4割近くが戻ってきています。都市部の企業に就職した学生の中にも、こちらに親の関係で戻ってくる学生も結構おりますので、我々が追跡できる3割以上が本当は戻ってきているのではないかなと思われまます。ただ、そこをどう追跡するかというところが検討課題としてはあると思います。

○秋重委員長

もちろんUターンをする学生を増やす。そのためにCOC+の事業や島根県の取り組みが非常に有効であるということだと思っておりますが、卒業するときに、そのパーセンテージを30%から33%に上げるとか、それにはまだ別の努力が必要かなと思っておりますが、その辺りは何か考えられていますか。

○堀内校長補佐

先ほど校長が申しあげましたように、今、低学年で色々な企業を知る取り組みとしてキャリア支援室などを中心に、松江テクノフォーラムの企業を知るという機会をここ数年増やしてきています。Uターンなどに影響するのではないかなと考えております。

○秋重委員長

ありがとうございます。

○平山校長

ただ、もう1点。先ほど教務主事の原のほうから説明がありましたように、非常に多くの求人がきております。その中から学生は選ぶわけですので、学生の希望、「外へ出てみたい」、「県

外で働いてみたい」という希望を組み入れることも大事だと思っています。

そのため、(県内就職の)30%の学生が減らないようにしていくということが大事なことで、県内で、高専を卒業した学生が働ける企業がたくさんあるということを知らせていくことで、一旦外に出てから、帰ってきている卒業生がいるということをしちゃんと把握し、その数字を出せれば、県内企業の方も納得いただけるのではないかと思います。こういう働きが間違いなく、県に戻ってくる「島根県のために働きたい」という学生を育てることには役立っているというようには考えております。

○秋重委員長

他に何かございませんか。

○藤間委員

今の話題に関連して言うと、産業人材を地元に着させるというのは、高等教育機関、我々産業界のように企業を支援する立場、行政なども全体の共通目標ということではあるのですが、今言われた大きな経済の流れの中で都会地へ流れていくのはやむを得ない部分があり、それはそれで優秀な人材が世界に羽ばたいていくという面でも、「外に出るな」と言って囲い込みだけをするというのもいかなものかという思いがあり、一度出た者が、何かをきっかけに、また戻ってこれるような、ルートをいかに確保していくかというのがとても大事だと思います。

帰ってきた若い人と話をしていて私がよく思うのは、行政とか、我々がやっている色々な取り組み以外に、同窓会や友人などのコアな人間関係が影響している部分がたくさんあるようです。一度就職して5年、10年経って、都会地に対する思いだったり、こちらへ帰ってきたいという里心が付くような、さまざまな動機があって、そういうときに後押しをしてくれるのは、同級生の情報などが結構大きいようです。我々よりも遥かに若い人たちは、そういう濃厚な小人数の仲良しのグループの色々な情報で「地元こういうものがあるよ」とか、「うちの会社はこうなんだけど」というところで後押しされて帰ってくるケースがあります。やはりそういう同窓会組織や親しい友人を通じた働きかけというのが、なかなか仕組みとしては難しいのですけれども、地元の人呼びかけるような、これは同窓会の副会長さんも来ておられますが、そういった取り組みなども少し意識していく必要があるように思った次第です。

○原副校長

同窓生同士の関係もそうですが、私もよく卒業生から相談を受けることもあります。大学だと自分の研究室の学生だけ見ているような形になりますが、高専で就職担当をやっていると40人全員を見ているので、卒業後も結構声をかけてくれて、結婚式に呼ばれたりとか、高専の教員と学生は割と関係良好です。そういったチャンネルを使って「帰りたい」という相談はよく受けています。ただ、それがなかなかマッチングしなくて、都会でやっている仕事でも「島根にはないよ」ということで、なかなか経験が活かせる仕事がすぐに紹介できない、また上手く紹介できていないという例もありますので、同窓会や学校そのものの仕組みで、もう少し教員のチャンネルを引き継ぐ仕組みができれば良いなと思っています。

○糸原委員

今年度、同窓会も設立50周年ということで、式典もやったのですが、なかなか組織としてもそういうことに応えられないところがあります。私も問題点を考えましたが、同窓会として、例えば情報工学科ができたりしているのですが、そのOBを役員に取り込めていないとか、女子学生の割合がかなり増えているのですが、女性を組織の中できちんと取り込めていないなど、そういうところで少し再編しなければいけないだろうなと思います。

同窓会の役割は何かというところも含めて、学校と卒業生との間のところをきちんと一緒にやれるように相談しながら、強化していかないと、単なる「地元就職頑張れ」だけではなかなか対応できないのかなというように思っています。これは同窓会としても課題として取り組んでいきたいなと思っています。

○平山校長

どうぞご協力をよろしく願いいたします。

○宮下副校長

本校はジョブカフェと連携してセミナーをやっております。そのときに卒業生に対しての相談窓口の紹介を毎年しております。そこで相談する卒業生も結構いるようですが、自分でハローワークに行って就職先を探し県内に戻ってくる人もかなりいます。高専卒は技術力を高めていますので、すぐ就職できるようです。

○秋重委員長

どうもありがとうございます。就職のことは高専さんだけの話ではなくて、コンソーシアム全体の話で、島根県としても県知事が創生計画の中で、「若い人をどのように定着させるかが一番問題だ」ということを言われていますので、我々もそれに応える形で何とか取り組みたいと思っております。

今、糸原委員が、「同窓会でも同窓会組織をもっと強めながら、Uターンを支援できるような体制をやっていく」ということを言われましたので、非常に力強いお言葉だと思っております。

他にございませんか。

○今岡委員

地元企業のテクノフォーラムの顧問という形で来させてもらっております今岡です。

地元の就職ということがありまして、実際、地元の企業としては、高専ほど優秀な人材が、豊富な学校はありませんので、本当に「来てもらいたい」、「来てもらいたい」というのがものすごくありますので、今後とも一生懸命接触したいな、また、応援していきたいな、学生さんたちにも「こんないい会社があるよ」ということを精一杯努めていきたいと思っております。

高専には就職の募集がものすごくたくさんあるわけですが、それは企業側の論理で「うちの会社に来てほしい」と。しかし、本当に大切なのは、Uターンでも何でも、ここで新しい企業を起こせるぐらいの人材なのです。新しい会社をここで実際に起こせる起業家が1人、2人帰ってくれば、そこに地元の若い者たちが就職できる場を作れるわけです。ですから、立派な会社に入って、良い給料をもらって、東京で、大阪でというのではなくて、本当にこの故郷で新しいスタートをして、そこに新しい花を咲かせるぐらいのパワーのある人材を、どうこの学校が教育できているかということも本当は願いたいところです。その辺りのところで、どういう努力をされているのかなということを少しお聞きしたいなと思いました。

○原副校長

専攻科のエンジニアリング・デザインとか、あるいは本科の学科横断の科目など、グループで地域の空き店舗問題だとか、市の土地の有効活用の方法など、色々な課題を解決するという起業家精神を育てるようなこともやっていますが、授業の中では育てきれないという側面があります。

ただ、最近見ていると、IT系企業は、終身雇用は、まずないと思って、最初から大学に

行って、「自分で起業する」という学生もいます。逆にそういう学生は県外へ、どんどんチャレンジして外資系企業で自分を鍛えて、それから起業します。そういう学生が増えているのは確かですが、県内にそういう学生が残るかどうかというのは、まだ少なく、「いずれそういう学生が帰ってきてくれたらよいな」という思いはあります。

逆に学生の進路指導の相談を受けたときに、「まず、何をやりたいか」と聞いたとき、「僕には起業は無理です」という学生もいて、それが極端に分かれている感じはしなくはないです。

ただ、昔ほど内向きではなくて、やはり「起業したい」という少し尖った学生も出てきて、そういう人はとりあえず大学でチャレンジして、そこから「やってみたい」というのは時々いるような感じはします。

○秋重委員長

キャンパスベンチャーグランプリで表彰されたという話もありましたよね。そういうところの教育というのはどのようになさっているのでしょうか。

○箕田専攻科長

専攻科の実験の中で、教員が道筋は立てるのですけれども、基本的には学生がアイデアを練ってきて、そして教員とディスカッションを何回か行い、練り上げるというようなことを繰り返し行っています。いずれのデザインもプロセスの一貫として、そういったことを実験で学びますので、そこで学生が話し合いをして、自分でバックグラウンドとといいますか、資料などを色々調べてきて、アイデアを紙ベースで起こすというような指導をしております。そして、それを必ず各グループ応募することになっておりますので、恐らく中国地区の高専の中でも一番多く応募はしております。その応募数が多いので、毎年受賞するというような形になっているかなと思っております。

○原副校長

キャンパスベンチャーグランプリの中で、まずアイデアを出し、そこで初めて収支とか、どのくらいで採算が取れるかという利益率や需要なども調べた上で、事業予測もします。

もし起業したときに会社の社屋でいくらかかるとか、レンタル品を借りるとか、人件費はいくらかかるということを学生は初めてそこで意識することになります。本科ではそういう教育がなかなかできていなくて、専攻科生になって初めて技術的なこととプラスアルファで、「需

要があって、これくらい売れば、何人を雇って」というコストを意識するので、コスト面についてできていないというところがあります。

○堀内校長補佐

グループに分けて、グループの中でアイデア出しからディスカッション、それから経営の話など、すべてグループワークで行っています。

○秋重委員長

それは何か正課の授業ですか。

○箕田専攻科長

そうです。必修科目で実験の中で4週分を使ってやっていますので、必ず体験するという形になっています。

○秋重委員長

それをきちんと教えるような、経営的などところも含めて教えるような先生方がいらっしゃるということですか。

○箕田専攻科長

もう10数年やっておりますので、毎年経験を積みながら、例えば受賞したプランはどういったものかという発表会もしますので、そういったところで少しずつノウハウといったものを蓄積して学生に伝えるということです。

○原副校長

出したアイデアの中で特許に抵触しているかどうかというところも、弁理士の先生に来ていただいて、何回か知財検索の仕方とか、特許の見方というのをやって、「必ず検索して、特許に抵触していないことを確認しなさい」というところまでやっています。

ただ、本科の学生だと、そこまでやりきれないかなと。専攻科の学生なので何とかできているかなというところでは。

○箕田専攻科長

専攻科の時間が、一応毎週ほぼ丸1日実験に使い、それを4週間やっていますので、結構時間をかけて、学生は自由に調べる時間はあると思っております。

○今岡委員

ありがとうございました。すごく希望を持ちました。もちろん会社に入って、そこから「スピンアウトしろ」ということではなくて、会社の中でも社内ベンチャーで新しい事業部を起こせる人が必要なのです。そういう意味でも、そういう人材の育成を心からお願いしたいと思えます。

もう一点、ある保護者から通学するほうが良いか、寮に入るのが良いのかと相談を受けたのですが、寮に入ると成績は上がるのかどうかということ。

先ほどの説明を聞くと40%の学生が入寮し県内のあちこちから来ているということもありますが、ティーチングアシスタントなど色々な形で先輩たちが引っ張っていく、また、色々な施設があるという点で寮が良いのではないかなと思えます。

○高見寮務主事

寮は勉強する環境としては多分良いとは思いますが、15歳から入ってというのは、いわゆる生活がきちんとできるかとか、食事の面とか、友だち関係とか、メンタル面とか、色々あると思います。個人個人、人によって違うのですが、「部活をしたい」とか、目標を持って入って、「勉強もしっかりしたい」という学生には良いと思います。

○村上学生主事

入学生の追跡調査は、私が入学ワーキングに入っているときに、7年間ずっとさせていただきました。当然寮生と通学生ということも含めて成績の比較をしましたが、ほとんど変わりはないです。ですから、寮にいたほうが勉強しやすいというようなことは一概には言えないというように思います。

恐らく入学してすぐスマホを買うと思います。昨年の卒業研究にもありましたが、スマホの利用時間と学習の成績、これは全く相関はありません。ただ、スマホに依存する依存度になると、かなり成績に影響を与えますので、使い方次第だと思います。ですから、家でゲームをやったとしても、恐らくきちんとけじめをつけてやれば全く問題ないと思います。

○平山校長

15歳で外へ出て、本校で5年間学んでいくわけですね。その子にとって、その子の将来、人生100年といわれていますので、将来にとってどれだけ良い機会か分かりません。環境ではなくて、彼か彼女かは分からないのですが、頑張ってもらいたいです。

○原副校長

やはり寮にいてスマホにはまってダメになっている学生もいますし、通学生でゲームにはまって全然レポートが出せない学生もいます。最後は自分なのですが、親元のほうがコントロールはしやすく、心配であれば親元のほうが簡単ではあるのですが、本当は「親の監督がなくても、自分でやる」と思ってやってくれるほうが良いと思います。

○平山校長

本人次第です。

○原副校長

そうです。結論はそれです。

○今岡委員

ありがとうございました。

○秋重委員長

入学者を見ていると、広島が随分顕在化していますね。これは何か理由があるのですか。

○平山校長

広島に向けて情報発信をしているということもあります。やはり島根県は少子化で、どんどん子どもの数が少なくなっていくので、うちの担当教員がかなり積極的に動いております。

○原副校長

ただ、そんなにたくさん増えているわけではなくて、広島の方は多少増えています。去年

と今年も神奈川から、今年は東京から受けてくれた受験生がいました。東京で高専の合同説明会をしていて、松江高専は参加していませんでしたが、そこに参加して受けたということでした。情報工学科に所属している教員の多くが本当に純粋に情報系の人で、そのような学科は、全国の高専でもたくさんはないということで、受験した者もいます。必ずしも島根県内だけではなくて、幅広くそういう子が来てくれることも必要だと思っています。

島根県内だけだと少子化の関係で、どうしても入ってくる子の学力低下も今後は進んでいくという懸念もありますので、少し県外のほうにも募集の手を広げています。

○秋重委員長

数字を見ると、平成 29 年の 4 人が 30 年は 10 人になって、令和元年は 22 人ということで、すごく増えてきているように見えたのですけれども。

○原副校長

確かに一時、広島の三次周辺の県北のほうで 1 回、地元の高校を守るために大分減らされた時期がありますが、また戻ってきているかなという形です。

○秋重委員長

分かりました。

他にありますか。

○芦田委員

お話をお伺いしまして、教育、研究、それからクラブ活動の指導、寮での指導、寮は宿直をされているのですよね。それから社会貢献、その上に島根大学との連携事業にもご協力いただいているということで、先生方はいつ睡眠をとっておられるのだろうかと思う次第であります。

高専機構の中期目標計画を読んでおりましたら、「課外活動・寮務等の業務の見直しを行い、教職員の働き方改革に取り組む」というようなことが書いてありました。多くの活動をなさって、素晴らしい業績を挙げておられることが持続していくということが重要だと思うのですが、そういう中で、効率的な取り組みというものについて、組織的にどのように取り組んでおられるのか、あるいは取り組もうとされているのかをお聞かせいただきたいと思います。

○村上学生主事

課外活動を担当させてもらっております。どんどん業務が増えて、何かを捨てないといけないとなると、やはり一番ターゲットになるのは課外活動で、縮小しようということです。本校におきましても、「課外活動は減らしていこうと思います」ということで、数的には増やしてはいないのです。ただ、物事が非常に多様化していますので、新しく研究会、「クイズ研究会を作りたい」とか、そういうのが逆に増えてきているような状況です。

私は一応、大会の引率も校務ということで先生方をお願いをしております。「年間3大会分ぐらいの引率をお願いしたいです」と。約2名ずつ課外活動担当がおりますので、「年間6大会ぐらいを大体基準に行ってください」と。それ以上になるような場合、先生方に負担がかかるので、「もしあれば相談してほしい」と。ただ、「基本的には6回にしてください」ということをお願いしたことが一つ。

もう一つは、結局引率を本校の教員がしないといけないということなのですが、今のところ中学校・高等学校・大学でも、部活動指導員という引率可能な非常勤教諭を校長名で採用して、教員の代わりに引率専門でしていただける教員の配置が可能になりました。ただ、運用のところで非常に難しい部分がありますので、本校も6月以降のところ、もし人がいらっしゃれば進めていこうと考えています。宇部高専さんはもう、9名ほど確保されているということですが、うちはまだ人材確保ができていません。3、4名の非常勤の部活動指導員の方が来られますと、先生方の引率の回数が恐らく多分半分以下になると思いますので、これは早急に進めたいというように思っております。

○高見寮務主事

以前は宿直・日直で教職員2名をずっと続けておりました。学生の質も良くなったということもありまして、ここ数年外部の方をお願いをして、警備員に入ってもらって、教職員の負担を減らしていく。日直に関しては、土日の昼の日直は1名。夜も週4回が教員1名の宿泊になりました。例えば学生が病気になったというときには、やはり一緒に救急車に乗っていかなければならない、寮が0人になるわけにはいけないので、そういうときに警備員にいてもらうというのは非常に助かりますので、そのように回していこうということになっています。

○秋重委員長

はい、どうぞ。

○糸原委員

昨年指摘させていただいたことですが、女性教員を確保していただいたということで、例えば専門の学科の先生はどの学科に採用されたかということをお教えいただきたいことと、せっかく来ていただいた先生ですので、色々チャレンジの機会を与えていただいて、地域のほうにも出ていただいて、学外からも協力しなければいけないかなとは思っているのですけれども、そのところをお願いしたいです。

あともう一点、これも昨年のごことで、専攻科の学生さんの PR ということもあって、引き続きまたお願いしたいなというところで、私の直属の部下が 20 人いますが、その中の 4 名が高専の卒業生で、本科と専攻科の卒業生がそれぞれ 2 名で、基礎能力はそんなに変わらないのですが、コミュニケーションの能力とかというのは、専攻科の方が良くて、これは個人の差でもあるのでしょうか、やはり専攻科で鍛えられたというか、先生方の指導が「実をむすんでるんだなあ」というのを感じているところもあります。そのため専攻科の良さを PR していただければありがたいという気がしております。

○宮下副校長

今年度採用の女性教員につきましては、1 名が情報工学科です。もう 1 名が環境・建設工学科です。2 名とも非常に活動的な方ですので、ぜひ協力依頼がありましたら、よろしくお願ひします。

○箕田専攻科長

専攻科のほうも、学科が混ざって専攻科を 1 つ作っており、その中で実験実習を全学生がやっけて、色々な学生と話をしながら物事を進めていくというようなプロセスもあります。恐らくそういったところで、少し鍛えられているのかなと思いますので、今後も学生の PR 等をさせていただきます。

○秋重委員長

女性教員については、何か機構のほうで決まりごとはあるのですか。何%まで女性教員の比率を持っていかなくてはいけないとか。

○平山校長

機構というよりも、文科省でございますが、地方都市と首都圏では、そもそも公募を出しても応募してくる人数が違うので、今年度は本当にたまたまで、今後もそのように採用できるかといったら、まずは応募してくれるような下地・仕組み作りが本当に必要だと思っています。そのためには島根県のほうでも、「島根は本当に住みやすく、子どもを育てやすく、妊娠したお母さんでも働きやすい」というようなことを島根全体として言っていたかないと、来たくない県になってしまいますので。その辺りは、うちだけが一生懸命広報をしてもしょうがないことで、高専機構のほうで30%と出していますけれども、それに近づくためには色々な仕組み作り・努力が必要だと私は思っています。仕事だけをしに来ているのではないので、ここに暮らしがあるので、暮らしやすくなかったら、仕事をしたい場所であっても来ないと思います。島根県に努力をしていただきたいと思います。

○秋重委員長

島根大学も若手の比率とか女性の比率とか、これが運営費交付金を評価的に傾斜配分する指標になってきています。そのため、そのパーセンテージをきちんと上げていかないと交付金がどんどん減らされてしまうということになってしまうので、非常に苦慮しているところになっています。

○平山校長

卒業生ですね。女子学生が入ってくれて、その学生が専攻科に行って、大学院に行って、戻ってきてもらえるような仕組みを作らないと、なかなか難しいところはございます。

○秋重委員長

2人確保されて、頑張られていますよね。

○平山校長

パーセンテージがドンと上がりましたので、少し安心はしております。

○秋重委員長

今は9人ですよ。72人中9人くらいが女性ですよ。

○平山校長

昨年まで問題だったのは、専門学科の女性教員が1人もいなかった、女子学生のロールモデルになる女性教員がいなかったということでした。ですから、若い女性教員、学生に近い方が来てくださり、非常にありがたいことだと思っております。

○秋重委員長

他にございませんか。

はい、どうぞ。

○藤間委員

これはお礼であり、お願いでもあるのですが、高専さんの新年度の授業カリキュラムの中で、具体的にいうと情報工学科の5年生ですが、**mruby/c**を使った授業が始まります。**mruby/c**というのは **ruby** を小型・実用化したようなもので、うちの財団のしまねソフト研究開発センターの職員が開発したものなのですが、これを使って高専の先生と一緒にやっていくということです。多分、こういう **ruby** を使った授業というのは全国初ということで、うちの職員も色々な講師として何回もお邪魔させてもらうこととなりますが、ぜひこれを良い形で成功させたいなというように思います。

○平山校長

ご支援をお願いしたいと思います。

○藤間委員

何が何でも **ruby** ということではないのですが、今や **IoT** が当たり前の時代になっていく中で、できるだけ学生さんにはそういう **IoT** の意識作りが、大事だと思っておりますので、ぜひ連携して良い形にしたいと思っておりますので、よろしく願いをいたします。

○原副校長

多分、教材とノウハウが溜まってきますので、またそれが色々なところへ広がっていくと良いなと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

○秋重委員長

はい、どうぞ。

○芦田委員

ご説明のときに、各学年各学科の学生数の表をお示しになったのですが、ほぼ定員、もしくは定員に非常に近い人数で、5年間でいいますと、学校でよく「真ん中の学年が中だるみ現象で、教育が難しくなる」と言われているというのは聞いたことがあるのですが、それが全く見受けられませんでした。何か特別な配慮といえますか、ご指導をなさっておられたら、少しお聞かせいただきたいのですが。

○原副校長

実はうちの学校は中だるみがありません。昔は2年生、3年生で勉強しなくなって、学校も遅刻ばかり増えるような傾向があったのですが、最近はそういうことはありません。

実は昔、「松江高専に入った時点で、みなさんは学生です。生徒ではありません。自分で考えて行動してください」ということで、1年生から大学生と同じような指導をしていた時期がしばらくありました。その時期に、すごく学校自体が荒れたことがありました。その後、1年生から3年生までが高校と同じような指導にしたことにより、あまり極端にクラス単位で朝からみんながだらけているようなクラスはなくなったというところが一つ大きいのかなと思っています。

中だるみが基本的にうちはないと思っています。

○平山校長

全くないわけではないとは思いますが。

○原副校長

3年生は、ベネッセの調査で学習時間が比較的取れているということです。他の高専は1年生から勉強力がどんどん減って行って、2、3年生で学力もガタッと落ちているのが、うちは進学校ほど勉強はしていませんが、きちんと1年生から3年生まで勉強量、学習時間が同じで、学力もほとんど下がらないという結果になっていて、ベネッセに言わせると「変わった説明が

できない学校」ということのようにです。

進学校は勉強時間が増えて、学力が上がりますし、授業効果はどんどん下がっていくけれども、本校は上りもしないが下がりもしないというところの大きな要因は、担任の先生方と情報共有が上手くできていて、学校に来なくなった子どもを早めに見つけてケアをしているとか、そういったところではないかなと思っています。

○平山校長

学生相談室からも説明していただければ。

○森田学生相談室長

中だるみとは少し違うものですが、本当にまじめな子が増えているのは確かなのですが、ストレス耐性が非常に低いというか、打たれ弱い人が非常に増えています。

それから、やはり家で保護者の方とコミュニケーションが取れていない可能性があって、自分がやりたいことと保護者が期待していることとか学校で学ぶことが上手く噛み合わなくなってきたときの逃げ場所がなかったりして、非常にその悩みを抱えます。それによって、4年生くらいで、いざ社会に出る準備、「自分はどうしたいか」ということを突き付けられたときに非常に弱いところが出てきてしまって、方向を見失うとか。非常に悩みのある子が結構増えてきているのが現状だと思います。

○芦田委員

ありがとうございます。取り組みが上手くいっているということでございまして、大変そのご貢献に頭が下がる思いでございます。

○秋重委員長

大体 15 時くらいになりましたので、まとめのほうに入っていきたいと思います。私がまとめるというより、みなさんからまとめの発言をお 1 人ずついただいて、それで講評にしたいと思います。よろしいでしょうか。

(外部委員会委員全員同意)

それでは、藤間委員よりお願いします。

○藤間委員

毎回お話を聞かせていただいています、学校運営についてはとても精力的にやっておられるし、それに応じて学生さんもよく応えて頑張っておられるなということで、非常に私は全体として取り組み評価をさせてもらっております。

冒頭のほうのお話にも出ましたが、やはり良い産業人材を作って、大きな意味で、長い目で、地域の経済に資するような形でも、その辺りの卒業後の色々なフォローも含めて、卒業生との色々な人間関係もまた作った上で、地元貢献してもらうような、そういう人材をぜひ育ててもらいたいということで、よろしくお願ひしたいと思います。

○芦田委員

先生方、あるいは事務の方も、負荷がだんだん増えているという点につきまして、組織的に負荷の低減を図っておられるということですので、一番重要なのはどの程度かということではないかと思うのです。ぜひ今ご活躍されているところを持続されていかれますよう、今後の低減にご努力をいただきたいと思います。

それから、特にですが、若い先生方の教育研究環境の改善といえますか、より良くなって、先ほど校長先生もおっしゃっておられたように、外からどんどん若い先生が応募して下さるようになることをお祈りしております。

それから、教育につきましては、集団指導体制の構築が非常に上手く機能しているようでして、この点につきましては先生方のご貢献に驚きといえますか、感謝申し上げる次第であります。

○今岡委員

松江高専に合格したら、みんなが拍手で「良かったね」というのが、この地域の1つの評価になっているというのは、いつもすばらしいなと本当に思っております。この学生さんたちが、できたら町のほうに出てきて、小学生や中学生が「あの言われていたイメージのお兄さんやお姉さんは、こんな立派な人たちなのか」というような、ポツと姿が見えるような場面というのを色々作ってあげてほしいなど、心から思いました。

本当にこの地域の宝ですので、さらにそれを伸ばしていただきたいなとっております。地域の産業からも精一杯応援しますし、期待しております。

○糸原委員

同窓会としましても、学生さんが伸び伸びと勉強ができるようにということと、それから教員のみなさんが活躍できるようにということについては、テクノフォーラムさんとも一緒になって、協力してやっていきたいなと思っております。今後ともよろしく申し上げます。

○秋重委員長

最後になりましたけれども、高専さんには 18 歳人口が減る中であっても、きちんと倍率を保ちながら努力し、良い学生を育てられている、クラブの活動とか、そういうところでも良い成績を収められて、学生たちが非常に活発に活動しているということがよく分かりました。

就職について、これは私も担当していますので、常に言わなくてはいけないのですけれども、30%というところを確保されながら、U ターンする学生さんたちを同窓会などと一緒になって今後も獲得していく。そして、さらに 30%が 40%になるくらいのことを 5 年、10 年後には目指すということを言われましたので、非常に心強く思っております。ぜひ実現していただきたいと思えます。

就職だけではなくて、この議論の中にもアントレプレナーシップ、起業家精神を作って、学生がスピンアウトするとか、そういうことも非常に重要であるということをおっしゃって、島根大学でもそういうことを今からやらなければいけないということをおっしゃっているのですけれども、なかなかできていない。それは高専さんのほうがずっと先を走られているなど私はつくづく思います。ぜひそういう経験値みたいところを島大のほうに教えていただきまして、島根大学からも学生がベンチャーを作っていくという、そういう道が作れるようにしていきたいと思えますので、これは協力をよろしくお願ひいたします。そういうところをお互いにやりながら進めていきたいなと思っております。

最後に、私が少し気になっていたのは、数理データサイエンス教育みたいなことがあまり出てきませんでした。その辺り、AI 戦略 2019 というのが出て、今、島根大学の全学生に対して数理データサイエンス、AI 教育をしなければならないということで、必修化しようとしています。高専さんは当たり前のこととしてやられているのかもしれませんが、そういうことについてもお互いに一緒にできれば良いなと思っておりますので、またよろしくお願ひいたします。

以上でございます。

○平山校長

ありがとうございました。

○木村学生課長

ありがとうございました。

最後に平山校長よりご挨拶申し上げます。

○平山校長

本日は本当にありがとうございました。貴重なご意見とありがたいお言葉をいただき、松江高専の励みになるようなお話をいただき、大変ありがたく思います。

ただし、社会がものすごく速い流れで動いておりますので、社会の方々に必要とされる人材をうちで育てていくためには、やはりそれに沿った新しいカリキュラム、新しい仕組みで動いていかなければいけないと考えております。

お褒めいただいたことで慢心するのではなく、常に新しいものも求めながら改善に努めていきたいと思っております。松江高専だけでできることではございませんので、島根大学、県の皆様、松江テクノフォーラム、同窓会、多様な方々のご協力を借りながら、良い人材を育てていけるように、これからも動いてきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。どうぞコロナウイルスに気を付けられてください。ありがとうございました。

○木村学生課長

それでは、以上をもちまして、令和元年度松江工業高等専門学校外部評価委員会を終了いたします。ありがとうございました。